

# 文化財 IPM コーディネータ資格を取得して

田 邊 優 子

## 1. はじめに

一昨年に実施された第2回「文化財 IPM コーディネータ資格取得講習会と試験」を受講し資格を取得した。講習会では基礎的な内容も含めて、興味深い講義が展開され、最近の動向や現場に近い情報を欲していた筆者にとっては大変有意義な時間となった。本稿では、学んだことを踏まえて、当館の状況、日々の業務で感じることも交えながら、「文化財 IPM コーディネータ」の役割について、少し考えてみたい。

## 2. 鉄道博物館と資料保管環境

まず簡単に当館の歴史について触れておきたい。「鉄道博物館」は鉄道を総合的に扱う博物館として、2007年10月14日、さいたま市・大宮の地に開館し、今年で7年目を迎える。ご存知の方もいるかもしれないが、前身は東京・神田にあった「交通博物館」である。「交通博物館」は、1921年鉄道開業50周年事業として、東京駅北側高架下に「鉄道博物館（初代）」として開館した。その後1936年に中央線万世橋駅に移転、1948年に館名を「交通博物館」と改め、陸・海・空の交通全般を取り扱うようになった。しかし増加する資料の収蔵スペース確保に苦慮し、建物の老朽化やバリアフリーの面からも問題を抱え、改善のためには移転するしかない状況に至った。そしてさまざまな段階を得て、鉄道に特化させた「鉄道博物館」として大宮に移転したわけである（写真1）。

収蔵資料は現在約60万点、乗車券のような小さな資料から実物の鉄道車両まで、さまざまな分野の資料を収集保管している。これらを約90年に渡り管理してきたわけであるが、保管環境と言う点で振りかえると、決して恵まれていたわけではなかった。移転以前の交通博物館では、レンガ造の高架下という構造上からくる「水分（湿気）」



写真1 鉄道博物館歴史ゾーン 36両の実物車両を展示している

に悩まされ、雨が降ると上から下からと水があふれ出てくることは日常であったというし、さまざまな生物の侵入も非常に多く、日々戦いが繰り返されていたという。もともと設計段階から博物館として転用するにふさわしい場所ではないとされていたわけで、立地、構造、限られた人員と予算の中で、当時の職員らは苦慮しながら長い間資料を守り続けてきた。

大宮に移転したのちは、施設・設備が一新された。収蔵・展示スペースも広がり、温湿度を保てる収蔵庫等も整えられ、完璧な状況を作ることは難しいにしても、資料を守るためのよりよい環境作りが格段にしやすくなったといえる。しかし設備、スペース等が徐々に改善されていく一方で、それを扱う側の人・体制という点ではまだまだとっていい。もちろん文化財 IPM という点での取り組みも進んでいるわけではないのが現状である。

## 3. 人の力、意識を高めることの大切さ

ところで、処置中心の対策から予防保存への転換という流れで広まる文化財 IPM の取り組み

であるが、実際どれだけの施設がどれだけのレベルで取り組んでいるのだろうか。他館の進捗状況が大変気になるところである。筆者も日頃から必要性を十分に感じ、情報を収集するよう努めているが、それらを日常的に反映できているかと言えば、恥ずかしながらごく一部としか言えない。文化財IPMの取り組みは構築までにやはり時間、手間がかかる。そしてこの取り組みの中心となるであろう学芸員は、日々多種多様な業務を兼務しているため、なかなかこれに専念することができないのはどこの館も一緒ではないだろうか。

1つの筆者の経験を記したい。開館当初の頃、予想をはるかに上回る来館者の数に日々対応に追われ、通常の館内清掃が入らない、つまり学芸員等にしか近づくことのできない資料周辺に埃が異常に溜まるという事象が発生した。手っ取り早いのは清掃を行うことであるが、1人で清掃するには広範囲すぎて手が足りず、また単発で清掃をするにしても一時しのぎで真の改善にはつながらない。もちろん何か対策を講じるような予算もすぐに付けられない。当時館内スタッフの中に共に問題意識を持ってくれた方がおり、まずは2人で週1回程度の清掃作業を始めた。徐々に他の学芸員やスタッフも巻き込んでしばらく続けたが、最終的に継続実施を定着させることができなかった。日々の業務の妨げにならない程度の作業量・時間・人員に設定して始めたものの、やはり各々が日々の業務に追われ、徐々に人が減り、主要メンバーが辞め、継続できなくなったというのが実情であった。当時の体制、手法の選択にも無理があったのだと思う。しかし、各人の「意識の差」というのも一つの大きな理由になっていたのではないかと今は感じている。つまりその意味と必要性が十分かつ明確に伝えられなかったため、新たな仲間を増やせなかったということである。

「意識の差」は各人の周囲にある「情報量の差」でもあると思う。文化財IPMは、まだ自ら積極的に出向いていかなければ情報を得られない分野であると感じる。そのため各人にその取得しにくい情報や理念を伝えていくことはもちろんであるが、それらが周囲に根付くように仕向けないと、継続は難しい。そして必要性を共有する仲間がい

て、途中で折れずに「共にやろう!」という気持ちになり、少しずつ分担することによって始めて継続する形になる。そのためには自館の人員・状況にあった情報や手法の選択・周知方も工夫して取り組まなければならないのだろう。この先何十年、何百年も守らなくてはならない資料を本当の意味で守るためには、個人で行うのではなく、人の体制も含めてシステムとして形を残さなくてはならない。講習会の場でも、何よりも全体での意識改革、そのための情報提供・共有が一步であるとのお話があった。自身の経験を振り返ってみても、そのように思う。極端な話、重要なのは設備の導入でも何かの調査や対処法の修得でもない、もちろんそれは必要な手段であり、深く学ぶべきことではあるが、やはり長期スパンで人の力、意識を高め、仲間を増やすことが一番なのだと思う。そうすれば1人に偏ることなく日々の活動もしやすくなるに違いない。なお、その後であるが、来館者数が安定したことと、埃が入りにくいように物理的な対策を施したことで、事態は収束している。

#### 4. 現在の取り組み

現在の当館における文化財IPMの具体的な取り組みとしては、部分的な粘着トラップ調査やその結果に基づく隙間埋め処置などごくわずかな範囲である。少しずつ対象範囲を広げて展開していきたいと考えており、今後は関連企業と連携等も含めて進めていきたいと考えている。またその他には、日々の業務の中で学芸員だけでなく館内の設備担当者等とコミュニケーションを取ることにも努めてきた。以前はこちらから一方的に問い合わせや作業依頼・相談をしている状態であったが、最近では館内の関係しそうな事象について、報告や情報を提供・提案をしてくれるようになってきた。おそらくこのような事柄の積み重ねが、今後の蓄積となり、のちの当館独自の仕組み作りが必要不可欠になってくると考えている。やはり資料は「人」が守るのである(写真2, 3)。

#### 5. おわりに

文化財IPMの取り組みは実に地道な作業であ

る。そしてそれを継続させられるような仕組みや新たな情報を提供しサポートするのがコーディネータに求められる役割であると認識している。そのためには正しい知識と手法はもちろんのこと、仲間を増やすための強い発信力と、現場での柔軟な調整力を身につけていくことが必要なのだろう。筆者自身は資格を取得したものの、まだ試行錯誤の段階で、まだそのような力を身につけるにはほど遠い状態ではある。まずは自館での取り組みを少しずつ進めながら、基礎的な知識や技術の習得に努め、幅広い視野で文化財IPMの全体像を掴むように心がけていきたい。今後も皆様からのご意見やご助言を頂きながら、よりよい環境作りに努め、貴重な資料の保存・活用ができるように努力していきたいと考えている。

(たなべ・ゆうこ

公益財団法人東日本鉄道文化財団 鉄道博物館)



写真2 展示室の隙間を埋める処置



写真3 ガラス戸の下にブラシを取り付け、外部からの侵入を防ぐ